

ネットはいま

第2部 つながる

12

携帯の向いの声援

「銅メダルやったね。今度見せてね」
先月16日夜、長野市の総合スポーツ施設「ビッグハット」。東京都三鷹市から来た会社員の安中幹雄さん(37)は、携帯電話に届いたメールに思わずはにかんだ。

安中さんは、障害者らが氷上で激しく競り合う「アイススレッジホッケー」の日本代表選手。3年前のトリノ・パラリンピックでも活躍した。この日の国際大会、3位決定戦で日本はノルウェーを2対0で破った。メールが届いたのは、その直後だった。

送り主は安中さんが所属する「東京アイスバインズ」の仲間、小林章章さん(37)。東京都武蔵野市で、パソコン画面に向かって声援を送っていた。「ぶつかり合いも臨場感があり、応援に力が入った」と小林さん。「パラリンピックもテレビ放映は得点シーンだけ。中継があれば選手の士気も上がる」と安中さん。

これは、ネットの生中継「モバチュウ」だ。この日、試合会場の観客は1000人にも満たなかったが、モバチュウでは延べ5千人が観戦。



氷上でパックを追い、激しくぶつかり合う選手がネット中継された＝長野市

録画にも1カ月で7千人近くがアクセスした。企画したのは、障害者や高齢者とのネットワークづくりに取り組むNPO法人・STAND(東京都、会員約30人)だ。

現場では5、6人のスタッフが手分けし、テレビ電話機能がある携帯電話やデジタルビデオを使い、ネット経由で東京の中継本部に送信。そこでテロップなども入れ、ネット配信している。

きっかけは03年。副代表理事の伊藤敦子さん(46)が応援している電動車いすサッカーのチームの全国大会出場が決まった。だが選手の一人が障害で長距離移動できず、出場できないことを知る。「試合を見せてあげたい」。挑戦したのが、専用機材のいない、携帯とネットの生中継だ。今では、車いすバスケットボール、視覚障害者サッカーの全国大会など、年に5、6の大会を中継する。

中継を見るのは障害者やその家族、友人ばかりと思っていた。昨年、障害者が手こぎ自転車
で東京と福岡間の1200キロを走破した中継では、口コミが広がり、10日間で18万件超のアクセスがあった。「ネットは障害者同士だけでなく、ゆかりのない人たちとも結びつけてくれる」
だが、モバチュウの約10人のスタッフは、ほぼ手弁当。伊藤さんは、企画書を配って長期的な支援を呼びかけるが、不況も重くのしかかる。障害者とネットのあり方を研究する立命館
大学大学院の松原洋子教授(50)は、「障害者のネットの利用が進む仕組みを、社会全体で底支えしなければ」と指摘する。(桜井林太郎)